

読書

経済論壇から



大阪大学教授 大竹 文雄

クリスマスのイルミネーションが美しい十二月。同じ飾り付けでも耐震強度の偽装という飾り付けが社会を揺るがしている。今年は、J-R西日本の事故、耐震強度偽装問題、株の誤発注問題といった日本の専門家の資質や監督制度の問題が問われる事件が相次いだ。

こうした問題が続げさまに発生したのはなぜだろう。本来「官」の仕事は「民」に任せたいことが原因だという批判が問題発生の都度巻き起こってきた。

これに対して、経済産業研究所研究員の小林慶一郎氏(週刊ダイヤモンド12月17日号)は、耐震強度偽装問題について、民間委託そのものに問題があったのではなく、「検査を受ける側が民間検査機関を選んで、検査代金を支払う仕組みに問題があった」と述べる。検査を受ける側が行政に計算書を提出し、行政が入札等で民間検査機関を選ぶようにしたり、行政が民間検査機関の検査結果の一定割合をランダムに選んで事後的に精査する仕組みにしておくべきだったという。

民に任せる際の制度設計の重要性は、特殊法人・独立行政法人改革や三位一体改革にもあてはまる。財務省財務総合政策研究所客員研究員の田中秀明氏



小林慶一郎氏



田中秀明氏



鹿島茂氏



加藤周一氏

兵庫県立大学助教授の赤井伸郎氏(論座1月号)は、地方への補助金として、地方の財政運営を成果ベースで評価する、一括交付金方式にすることを提案して

共立女子大学教授の鹿島茂氏

「改革」には混乱がつきものだ。東京大学助教授の玄田有史氏(文芸春秋1月号)は、適度な「改革」を行うためには、抵抗勢力による反対に遭うことを前提に、「極端」な方向に走ることで目標達成を目指すという「振り子理論」の重要性に着目している。もっとも、玄田氏は

この理論には限界があるとも述べている。何度もそうしたことがあると、警戒感から変化自体に拒否反応を示すようになるか、ますます極端な扇動を求める社会にならぬかという副作用の危険があるからだ。耐震強度偽装事件に関する世論をみていくと、確かに玄田氏の指摘が当てはまっている可能性がある。「官」から「民」へという改革が行われても、問題が発生すると、今度は大きく民への不信と官への信頼という形の議論が展開されがちである。真に改革を成功させるのは、華々しい極端な政策ではなく、むしろ地味な断続的な見直し作業なのではないだろうか。

# 予見困難な改革リスク

いる。公務員数削減や補助金カットという分かりやすい目標を達成することばかりに力を注ぐのではなく、注意深い制度設計が今こそ必要だというのが赤井氏の主張である。

確かに、官から民へ、事前的な規制から事後的な評価へとという流れは、効率的な政府を達成する上で不可欠である。しかし、その方向性は正しくても、コスト削減だけを目標にしているのと、私たちは手痛いしっぺ返しを受けかねない。まずコスト削減ありきではなく、どのような仕事を民間化するのか、どのようにそれを監視していくのかを真剣に考える必要がある。事後的な評価制度の整備や十分な評価能力を有する専門家の育成など、評価のためにもっと時間やコストをかけることが求められ

この理論には限界があるとも述べている。何度もそうしたことがあると、警戒感から変化自体に拒否反応を示すようになるか、ますます極端な扇動を求める社会にならぬかという副作用の危険があるからだ。耐震強度偽装事件に関する世論をみていくと、確かに玄田氏の指摘が当てはまっている可能性がある。「官」から「民」へという改革が行われても、問題が発生すると、今度は大きく民への不信と官への信頼という形の議論が展開されがちである。真に改革を成功させるのは、華々しい極端な政策ではなく、むしろ地味な断続的な見直し作業なのではないだろうか。

## 専門家育成焦点に

ているのではないか。

一方、日本の専門家そのものには問題がないのだろうか。ジャーナリストの櫻井よしこ氏(週刊ダイヤモンド12月10日号)は、審査機能が働かない上に専門家が専門家たる責任感と誇りを捨て去ったことが耐震強度偽装事件の原因だと強調。今後の課題として各分野の専門的能力を備えた、心ある人々を育成することが大切であり、時間がかかってでも教育に力を注ぐべきだと述べている。櫻井氏の指摘に

大きな問題に対して全体を俯瞰して発言できる人がいない状況にあるという。そのため、大問題になればなるほど、専門家が自分の専門領域に「撤退」するため、素人が集まって、いい加減なことを言ってしまうことになる。同氏の指摘は、専門化が進んだ時代における視野の広い専門家養成の難しさを的確に言い表している。

その際には、できる限り副作用の発生可能性を考慮することが必要だが、すべてを予見することはできない。そうかと言って、古い制度は現代の社会で機能不全を起しており、私たちはもはや後戻りできない状況に置かれている。結局、副作用リスクを前提として、そのリスクにいかに対処するかという術を私たち一人ひとりが身につけるしか道はないのである。

題の発生は避けられない。制度改革の難しさは、ほんの一部